

小学校 特別支援教育

特別な教育的支援を必要とする児童の気になる行動について検討するケース会議

特別支援教育課 研究員 尾形 克幸

要 旨

小学校1・2学年の特別な教育的支援を必要とする児童の気になる行動について、短時間で検討するケース会議を設定した。児童の気になる行動を改善するために検討することによって、具体的な支援方法が導き出され、効果的に支援をすることができた。

キーワード：ケース会議 特別な教育的支援 気になる行動

I 主題設定の理由

学校には発達障害を含む障害のある児童の実態把握や支援の検討を行うために校内委員会が設置され、児童についてのケース会議が行われている。その会議に出席した際に実態の説明や指導経過の報告が多く、支援方法や評価の検討が少ないように感じられた。その理由として、情報共有に時間が割かれ、検討する時間が取れないことや検討方法がよく分からないことが考えられる。藤川・石田・福永(2010)は、ケース会議実施には「時間や人員の確保が難しい」「ケース会議の持ち方・進め方が分からない」といった課題があることを挙げている。そのため、明確な手順や方法、限られた時間での会議の進め方を検討する必要がある。

本研究では、特別な教育的支援が必要な児童の気になる行動について検討する際に、ケース会議を短時間でできるようにした。そして、導き出した支援を実践し、ケース会議の効果を考察した。

II 研究目的

特別な教育的支援を必要とする児童のケース会議を数回に分けて、短時間で検討することにより、気になる行動を目標とする行動に変えるための支援方法を導き出すことができることを明らかにする。

III 研究の実際とその考察

1 ケース会議での検討方法

児童の支援について検討する場合、複数の教師で検討することが大切である。その際、検討内容や手順を明確にして進める必要がある。そこで、神奈川県立総合教育センター(2009)と福岡市発達教育センター(2013)を参考にし、検討手順を整理した。ケース会議は4回に分けて行い、1回の会議時間は30分(1人15分、2名)で検討することにした。なおケース会議を行う前に、児童の気になる行動や得意なことを担任が「行動書き出しシート」に記入した(図1)。各ケース会議の手順及び検討内容は以下のとおりである。

(1) ケース会議(1回目)の検討内容

「行動書き出しシート」の記入内容を基に、ケース会議で検討対象となる児童を決める。次に気になる行動を検討する。

(2) ケース会議(2回目)の検討内容

児童の目標とする行動を検討する。そして、目標とする行動ができるための支援を検討する。

(3) ケース会議(3回目)の検討内容

(年 月 日)	
学年 名前 _____	
気になる行動	得意なこと

図1 行動書き出しシート

支援をした時の児童の様子を担当が説明し、他の参加者の意見を聞いて、支援方法を再検討する。修正する場合は、二重線を引き、新たな支援を記入する。

(4) ケース会議（4回目）の検討内容
 気になる行動について、支援によって変化が見られたことを整理し、評価する（図2）。そして、支援の継続について検討する。

支援の評価		支援の評価
	支援によって変化が見られたこと	
(1)		効果あり → 終了・継続 やや効果あり 効果なし 修正→
(2)		効果あり → 終了・継続 やや効果あり 効果なし 修正→
(3)		効果あり → 終了・継続 やや効果あり 効果なし 修正→

図2 記録シート

2 研究協力校での実践

(1) ケース会議の対象

ケース会議は、A小学校で1・2学年を対象に、2016年5月に3回と8月に1回の計4回行った。ケース会議の参加者は、1学年と2学年の学級担任、教頭、特別支援教育コーディネーターの4名であり、進行は特別支援教育コーディネーターが行った。2学年児童、1学年児童の順に検討した。

(2) 2学年児童についてのケース会議

ア ケース会議（1回目）

児童3名の気になる行動について担任から説明があった。B児は学習の遅れ、C児は友達への意地悪、D児は忘れ物であった。そのため、B児には放課後に補充指導を行う、C児やD児には担任が注意するという支援をしていた。担任の説明を基に対象児童の選定について検討したところ、B児やC児は現状の支援を続けることによって改善が期待できるが、D児は改善が期待できず、新たな支援を検討する必要があることにまとまり、対象児童をD児にすることにした。D児の気になる行動は、ものさしや筆箱、鍵盤ハーモニカなどを忘れることから、学習用具を忘れてくることにまとまった。担任から持ち物を確かめられないまま登校すると説明があり、家では連絡帳を見ていないという家庭からの連絡があったため、連絡帳の持ち物の欄を見ないで登校することが考えられた。

イ ケース会議（2回目）

D児の目標とする行動として、学習用具の準備をする、忘れ物をしない、学習用具を持ってくるなどの意見が出された。これらの意見を基に目標とする行動を検討したところ、事前に一人で確かめて学習用具を持ってくることに決まった。支援については見て分かりやすい掲示物が必要であることが確認され、学習用具を文字と絵で表した「持ち物確認プリント」を玄関に掲示することに決まった。また、持ってきたときには、「持ってきたね、いいね」とほめることを確認した。

ウ ケース会議（3回目）

「持ち物確認プリント」を玄関に掲示したところ、忘れ物をしない日があったことが担任から述べられた。良い変化が現れたため、この支援を継続することにした。

エ ケース会議（4回目）

姉に声をかけられてから「持ち物確認プリント」を見て確かめていることや、忘れ物が減ってきていることの説明が担任からあった。忘れ物が減っているが、自ら確かめていないことから、支援の評価は「やや効果あり」とした。そして、自ら確かめられるようになることが期待されるため、支援を継続することにした。

(3) 1学年児童についてのケース会議

ア ケース会議（1回目）

児童4名の気になる行動について担任から説明があった。E児は注意が持続しない、F児は発音に不明瞭が見られる、G児は指示した以外のことをする、H児は友達に嫌がることをするということであった。そのため、E児にはこまめに声をかける、F児には放課後に補充指導を行う、G児には個別に声をかける、H児にはその都度注意するという支援をしていた。担任の説明を基に対象児童を検討したところ、E児やF児、G児は現状の支援を続けることで改善が期待できるが、H児に注意をしても友達に嫌がることをすることから、H児に対して新たな支援を検討する必要があることが確認され、H児が対象に決まった。H児の気になる行動は、友達に石を投げる、パンチをする、耳に息を吹きかけることから、ちよっ

かいを出すことにまとまった。担任から、H児は次の課題について、近くの児童に尋ねようとして「ちょっと」と言うが、返事がない時にちょっかいを出すことが多いという説明があった。この説明を基に整理したところ、次の課題が分からないためにちょっかいを出していると考えられた。

イ ケース会議（2回目）

H児の目標とする行動として、友達にパンチをしない、叩かない、仲良くするなどの意見が出されたが、これらの意見を基に目標とする行動を検討したところ、場に応じて話すことや、人との関わり方を身に付ける必要があるということが確認された。そして、遊ぶ場面で身に付けられるようにすることがH児にとって適した支援になるのではないかということが確認された。友達と遊ぶためには、声をかける必要があるため目標とする行動は、「入れて」「一緒にやろう」と声をかけることに決まった。また仲良くできた時には、「仲良くできたね」「よかったね」とほめることを確認した。H児が声をかけるために行う支援として、学級全体で遊ぶことができるのは昼休みに限られることから、昼休みにみんなで遊ぶ時間を設けることに決まった。

ウ ケース会議（3回目）

昼休みに連絡帳に連絡事項を書いている児童が多く、H児は友達に声をかける機会が少なかった。そこで、遊ぶ曜日を決め、その曜日には他の活動を入れないことにし、支援を継続することにした。

エ ケース会議（4回目）

H児が「入れて」「一緒にやろう」と声をかけることはなかったが、友達に「遊ぼう」「こっちに来て」と誘われると一緒に遊んでいた。みんなで遊ぶことによって学級が親しげな雰囲気になり、H児が授業中に「ちょっと」と声をかけた時に応える児童がいたという説明が担任からあった。目標とする行動について顕著な変化は見られないものの、近くの児童が気にかけるようになったことで、ちょっかいを出すことが少なくなり、ちょっかいを出した後に謝ることもあった。評価は「やや効果あり」とし、H児が話しかけるようになることが期待されるため、支援を継続することにした。

3 ケース会議実施後の感想

ケース会議を行った先生方から幾つかの感想が出された。

- ・児童の気になる行動や目的とする行動を細分化し、項目ごとに記入したことは、児童を深く理解することにつながると感じた。
- ・他の先生から多くの意見をもらい、児童について多面的に検討することができた。気になる行動に着目することや支援などが参考になった。
- ・児童の気になる行動に着目したことで、支援について検討がしやすくなり、支援後の変化を捉えやすくなった。
- ・支援をすることで児童に良い変化が現れるだけでなく、周囲の児童にも良い影響が見られた。
- ・1回目から2回目までの間隔が空くと、検討することが難しくなると感じた。気になる行動から目標とする行動までを一度に検討することが大事だと思った。
- ・目標とする行動を検討する際、一人15分では時間が足りなかったので、弾力的に時間配分を扱えるといいと感じた。
- ・気になる行動のきっかけになる出来事を見ていないことが多く、確かめられない場合があるので検討することが難しかった。
- ・低学年では放課後に30分の会議時間を確保できるが、中・高学年では確保が難しいと思った。

感想には、複数の教師で支援方法を検討することで児童を深く知ることができ、児童の変化を捉えることができたという良い評価があった。しかし、ケース会議を実施する間隔が空くことや検討する時間の配分など、会議の設定や手順について改善を望むものもあった。

4 研究の成果と課題

ケース会議で検討内容を児童の気になる行動に絞ることによって、児童の実態を詳しく探ることができた。また、実態を詳しく捉えたいうえで目標とする行動を検討することによって、具体的な支援を導き出すことができた。会議時間を30分にすることによって、放課後にケース会議を複数回行うことが可能となり、支援方法や評価の検討をすることができた。

今回の実践では、支援するまでに時間がかかることが課題として挙げられる。5月にケース会議を開始したが、支援方法の検討と修正に3週間ほどかかり、6月から支援を実施することになった。できるだけ

早く支援を行うために4月中旬からケース会議を開始し、2週間以内に支援の検討を終え、4月末までに支援を実施できるようにする必要がある。

ケース会議で複数の教師が支援方法や児童について意見を出し合いまとめていくことで、担任だけでは考えられなかった具体的な支援方法を導き出すことができた。特別支援教育コーディネーターが手順を把握し、参加者に発言を促したり意見を整理したりすることで会議が滞ることなく進められていた。会議を進めるために特別支援教育コーディネーターの役割が大切なことが確認された。

IV 研究のまとめ

本研究では、児童の気になる行動について、短時間で検討するケース会議を設定した。ケース会議で児童の実態や行動を細かく検討することで、担当者間の共通理解が図られた。導き出された支援を行うことにより、2学年児童と1学年児童の気になる行動が減ったことから、ケース会議での検討は効果があった。今後は会議時間の設定や進め方を工夫することによって、中・高学年でもこのケース会議の方法で検討できるようにしていきたい。

<引用文献>

- 1 藤川健, 石田浩一, 福永美奈 2010 「特別支援教育における実際的研究Ⅱ—小・中学校における校内支援体制の充実に向けて—」『山梨県総合教育センター平成22年度研究紀要Ⅲ特別支援教育』, pp. 1-10, 山梨県総合教育センター

<参考文献・URL >

- 1 神奈川県立総合教育センター 2009 『はじめよう ケース会議 Q&A』
http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/h20/pdf/case_m.pdf (2017. 1. 16)
- 2 福岡市発達教育センター 2013 『ケース会議マニュアル』
<http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/hattatuc/5download/h24ke-sukaigi.pdf> (2017. 1. 16)